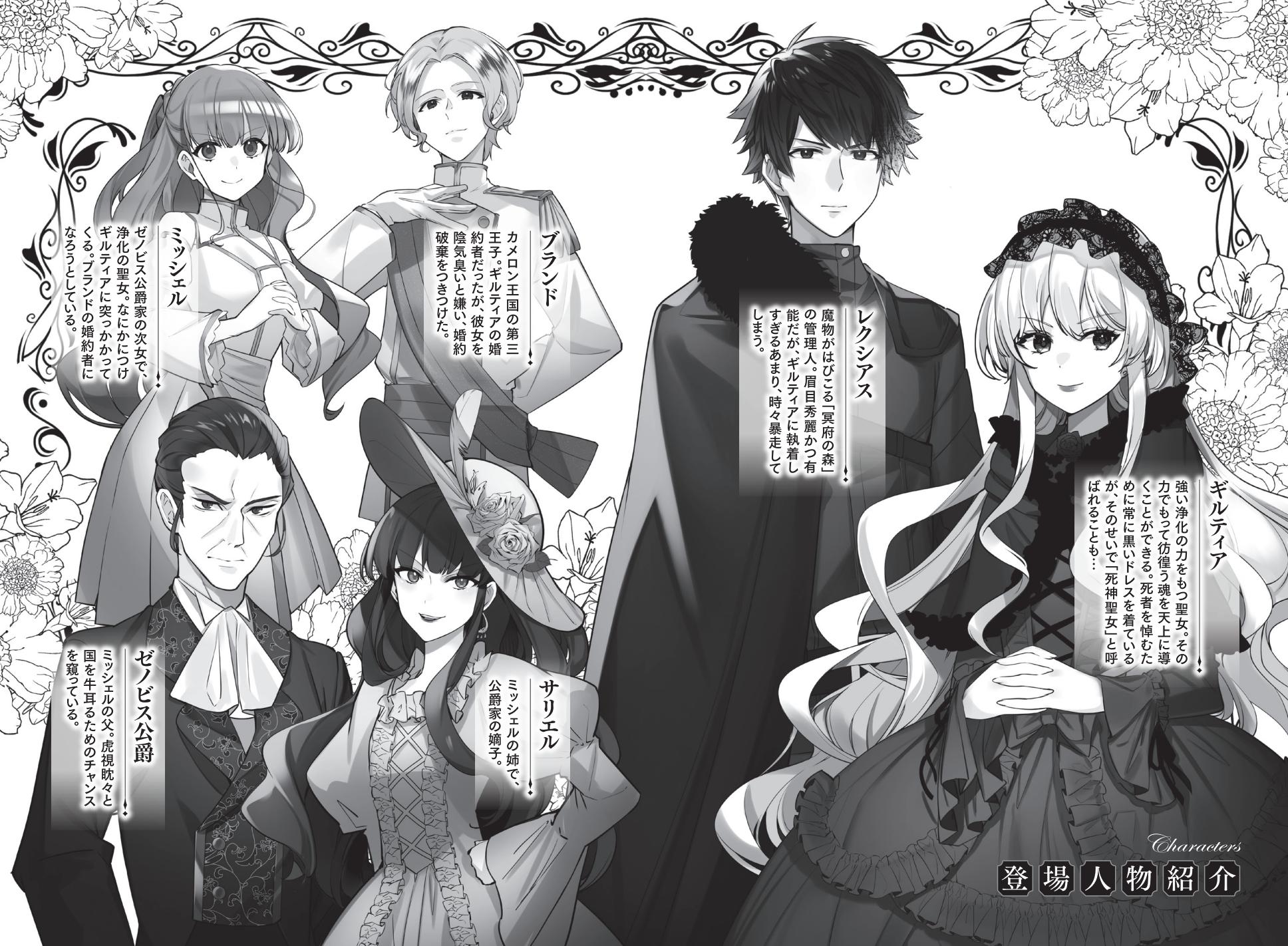


婚約破棄からの追放とフルコースいたしましたが、  
隣国の皇子から溺愛され甘やかされすぎて  
ダメになりそうです。



ゼノビス公爵

ゼノビス公爵家の次女で、  
浄化の聖女。なにかにつけて  
ギルティアに突っかかるて  
くる。ブランドの婚約者に  
なろうとしている。

ミツシェル

カameron王国の第三  
王子。ギルティアの婚  
約者だったが、彼女を  
陰気臭いと嫌い、婚約  
破棄をつつけた。

ブランド

魔物がはびこる「冥府の森」  
の管理人。眉目秀麗かつ有  
能だが、ギルティアに執着し  
すぎるあまり、時々暴走して  
しまう。

レクシアス

強い浄化の力をもつ聖女。その  
力でもって彷徨う魂を天上に導  
くことができる。死者を悼むた  
めに常に黒いドレスを着ている  
が、そのせいで「死神聖女」と呼  
ばれることも…

ギルティア

ミツシェルの父。虎視眈々と  
國を牛耳るためのチャンス  
を窺っている。

サリエル

Characters

登場人物紹介

## 目次

婚約破棄からの追放とフルコースいただきましたが、  
隣国の皇子から溺愛され甘やかされすぎて  
ダメになりそうです。

女神のご褒美

婚約破棄からの追放とフルコースいたしましたが、  
隣国の皇子から溺愛され甘やかされすぎて  
ダメになりそうです。

## 第一章 死神聖女は自由になりたい

「ギルティア・エル・マクスター、死神聖女である貴様との婚約はこの時をもつて破棄し、私は新たにミツシェル・リア・ゼノビスと婚約を結ぶ！」

死神聖女——私はそう呼ばれている。

煌びやかなシャンデリアの光が降りそそぎ、目の前の婚約者の金色の髪を美しく輝かせている。

私の婚約者であるカameron王国の第三王子ブランド殿下は見た目だけは素晴らしい、どこにいても注目的になっていた。今もその容姿と高らかな宣言で、貴族たちの視線を集めている。

この場は第二王子の誕生祝賀会。幸か不幸か、国王陛下たちはまだ入場していない。

「……ブランド殿下、正気でございますか？」

思わず本音がぽろりとこぼれてしまった。

このカameron王国には、民を守るための特別な存在として聖女という役職がある。

聖女は能力によつて三種類に分けられ、攻撃が得意な『破魔の聖女』、結界が得意な『守護の聖女』、そして彷徨う魂を天に導く『浄化の聖女』がいた。それぞれの聖女の頂点に立つのが、国王から任命された認定聖女で、各聖女の中で一番力の強い者が選ばれる。

この認定聖女を中心にして、王国は凶暴で邪悪な力を持つ魔物から人々を守つてゐる。さらに認定聖女はその優秀な遺伝子を残すため、王族、あるいはその近親者との婚姻を義務づけられていた。私は伯爵家の長女だったが、浄化の認定聖女として十歳の頃から役目を果たして、例に漏れず第三王子の婚約者でもあった。

……もう過去形のようだけれど。

「正気かだと!? 当たり前だ！ 冗談でこのようなことを言うわけがないだろう！」

「そんなに大声で叫ばなくとも聞こえておりますわ。でも、そうですか……本気ですかね？」

ブランド殿下の腕にしなだれかかるようにして立つのは、私の次に浄化の力が強いゼノビス公爵家の次女ミツシェルだ。ふわふわのピンクブロンドの髪と水色の瞳が愛らしい令嬢である。

聖女と権力者との婚姻が繰り返されてきたので、この国では高位貴族に力の強い聖女が生まれやすい。適性がある女兒は専門の教育機関である中央教会に所属し、共同生活を送ることになる。当然私もミツシェルも、中央教会の施設とともに過ごしてきました。

そういえば、ミツシェルはやたらと私に突つかかってきていたわね。たいして害がなかつたから放つておいたのだけど。

「ああ、本気に決まつてゐるだろう！ 貴様の着てゐる黒いドレスは陰気臭くて我慢ならん！ 私がなにを話してもニコリとも笑わず、あまりにも不気味だから死神聖女と呼ばれているのに、改善もしないではないか！」

「……黒いドレスを着てゐるのは死者の魂を弔うためですわ。ニコリともしないのは申し訳ないこ

とでしたが、殿下のお話には笑顔になる要素がございませんでしたので」

「なあつ!?」

確かにブランド殿下の指摘は間違つていない。

私は浄化の認定聖女になつてから、黒いドレスしか着てていない。それでも、流行の形を取り入れたり、レースをふんだんに使つてみたり工夫はしていた。

今日のドレスだつて王室御用達のデザイナーに頼んだものなのに。

笑顔を見せないのは、ブランド殿下がお話しする内容が、どこそこの令嬢にアプローチされただの、有名な画家に肖像画を描かせただの、どうでもいいことばかりだからだ。たまに語る武勇伝でさえ、前線から遙か後方で安全に討伐したというものなのすもの。いえ、王子様ですから安全を確保しなければいけないのは理解できるのだけど。

ただ、いつも最前線で魔物の討伐をしている私は、どうしても彼を持ち上げることができなかつたのよ。

「くつ！ これだけではない！ 今日は貴様の非道なおこないを明らかにするために、この場を選んだのだ！」

「非道なおこないですか？ いつたいどのような？」

まるで心当たりがない。

「ミツシェルから聞いているぞ！ 貴様は中央教会でミツシェルに髪飾りやアクセサリー、艶やかなドレスの着用も禁止したそうだな!? ミツシェルは陰険な仕打ちをされたと泣いていたのだ

ぞ!!」

「……中央教会では魔物との戦闘訓練がございますので、アクセサリー類の着用はもともと禁止されています。ドレスについては、浄化の際に魂になつた方から伝言を頼まれて、ご遺族様に訪問することがあります。その際には暗い色のものを着るように言いました」

実戦ながらの模擬戦闘があるのに、アクセサリーなんて着けていたら大きな怪我につながりかねないし、死者の最後の言葉を伝えるのに派手な格好でなんて行けるわけがないでしよう。悲しみにくれるご遺族の神経を逆なでしたいのかしら？

「そ、そんなんつ！ だが、伯爵家である貴様が公爵家のミツシェルに命令するのは不敬であろう!!」

「お忘れですか？ 私は認定聖女なので、王族の皆様と同等の立場ですわ」

だからといって、わがままを言うわけではないけれど。

「しかし、戦闘訓練の時にミツシェルにわざと怪我をさせただろう！ ミツシェルは心に傷を負つて、一ヶ月も外に出られなかつたんだぞ!?」

ブランド殿下の言葉に、はてと考える。

怪我をした後、一ヶ月外に出られなかつた？ ああ、ひと月も引きこもつた上に私のせいだとわめき散らしていたアレのことかしら。

「……その時突き飛ばしていなければ、ミツシェルは飛んできた剣でもつと大怪我をしておりました。心の傷かどうか存じませんが、確かにひと月は怪我が治つてもお休みされていましたわね」

突き飛ばして怪我をさせたといつても、手と足を少し擦りむいただけでしたけど……公爵家の令嬢には大怪我になるのかしら？

訓練をお休みして、毎日優雅にティータイムをとつていたのは知つてゐるけれど。

なんだか、話していくと疲れるわ。

一週間におよぶ魔物討伐から、やつと戻ってきたところなのに。

毎度のことだけ婚約者から<sup>いたわ</sup>勞りの言葉もない。この祝賀会に出ることさえウンザリしているのをわかってほしいわ。

ブランド殿下のおつしやる内容がくだらなすぎて、耐えられない。今すぐ解放してくださらないかしら。

待つて、解放？

あら……私、気付いてしまったわ。

目の前に転がつてゐるのは、またとないチャンスではなくて？

嫌だわ、気付いてしまつたらニヤけてしまふじゃない。今こそニコリともしないと言われた無表情を貼りつけなければ！

「もう結構ですわ。婚約破棄を<sup>うやくき</sup>承ります」

「つ！ ようやく自分の罪を認めたのだな!! それでは、ギルティア・エル・マクスターから即刻、認定聖女の地位を剥奪し、『冥府の森』へ追放とする!!」

「かしこまりました」

台本でも用意していたのだろうか。言い終えたブランド殿下は得意気に胸を張つてゐた。

冥府の森……魔力の磁場が狂つていて、魔物が大量発生する危険地帯ですわね。

あの地を管理してゐるのは、大陸一の軍事力を持つユーネリッド帝国。許可なく森に立ち入つた者は魔物に喰われるか、管理してゐる帝国軍に侵入者として捕らわれると聞いていますわ。

ブランド殿下が許可など取つてゐるわけないわね。そう、どうやつても私を処分したいというの。

近衛騎士に<sup>うなが</sup>促され、私はわざと<sup>うつむ</sup>俯きながら会場を後にした。会場内は静けさに包まれていたけど、私の頭の中はこれから準備のこととでいっぱいだ。

とにかくこの状況がひつくり返らないうちに、さつさと冥府の森に向かわなくては。

騎士たちに思いのほか丁重に馬車に乗せられたところで、私は思いつきりにんまりと笑う。

このチャンス、絶対にものにするのよ！

あのボンクラ王子から離れられて、しかもまつたく自由のなかつた聖女生活から解放されるのでもの！

なんとしても冥府の森の管理者から逃げ切つて自由を手に入れなくては……!!

冥府の森で生き抜くために最低限の荷物だけでも取りに行きたい、と護送してくれる騎士たちに伝えると、中央教会に立ち寄つてくれることになつた。

私室に行き必要なものをマジックポーチに詰め、家族宛の手紙を書いて中央教会に託す。

私が聖女になつてからは離れて暮らしているけど、父と兄は変わらずに愛し続けてくれた。父は母が亡くなつた後も後妻を娶らず、兄もまた十歳からひとりの女性を想い続けるほど愛情深い。

私がこんなことになつて悲しませてしまうのが心残りだつた。だからこれは私が望んで追放されたのだと、どうか悲しまないでほしい、としたためた。

そうして聖女の制服である黒い膝丈のドレスに着替えて、また馬車に乗り込んだ。王都を出たところで騎士たちが転移の魔道具を使い、冥府の森へと移動した。正直、ニヤニヤするのを我慢できていたか自信がない。

こうして無事に冥府の森へと追放していただき、私は自由への一步を踏み出した。

冥府の森で暮らし始めて一週間が経つた。

私は森のど真ん中で純白の折りたたみ簡易テーブルを広げ、ゆつたりと椅子に腰かけて優雅なティータイムを楽しんでいる。このテーブルセットは魔物討伐の遠征中でも、聖女が心のゆとりを保てるように考案された優れものだ。

鼻先をかすめるお茶の香りが中央教会でよく飲んでいたものと似ていて、荒波のようだつた日々が思い出される。

中央教会に十歳で所属して、八年が過ぎた。

聖女の力が発露した少女たちは問答無用で家族と引き離され、中央教会の管理下で国のために力を使えと強要される。そして魔物討伐の最前線に出ても簡単には死なないようにさまざまな訓練を課せられていた。

地獄のような訓練をこなし最前線で魔物たちと戦ううちに、ずいぶんとメンタルも鍛えられた。

死神聖女と呼ばれ、貴族社会から疎まれ嫌われていても、命をかけた戦闘を前にそんな些細なことは気にならなくなつた。

なにより仲間たちにはちゃんと理解されていたし、小さな世界にとらわれる貴族たちを哀れだとさえ思つていた。

貴族たちは家門から聖女を輩出して評価を高めるため、あらゆる手を使って聖女を伴侣として迎えようとする。そして子供を産ませた後は放置するのが常だ。

特に認定聖女は、結婚相手は王族かその血筋の貴族と決まつていて、逃れることは許されなかつた。ただただ押しつけられたものを受け入れて、国のために身を粉にして働く。それが聖女だ。

だからこそ仲間は大切な存在だつたし、私だけ自由になつて申し訳ないと思つてゐる。

「いけないわ。あまりに平和すぎて過去を懐かしんでしまつたわね」

私は気持ちを切り替えて、今夜の食事について思考を巡らせた。

「今日の夕食はアグリポークのステーキがいいわね。昨日森の奥で見かけたあの獲物に決めたわ」この冥府の森はほとんど人の手が入つてゐない。そのため動植物が豊富で、食糧には困らなかつた。

昨日薬草の採取をしている時に見つけた獲物——アグリポークを思い出す。むつちりとした肉は、塩を振つて焼いただけでもきつと美味しいだろう。

飲み終えたカップを魔道具で清浄して、テーブルと椅子を片づける。そして、それらを腰につけたマジックポーチに収納していく。このマジックポーチは聖女に支給された魔道具で、冥府の森で

生き抜くためには必須だと思い持つてきたのだ。本当にいろいろな場面で役に立つている。片付けを終えた私は鼻歌を歌いながら、軽やかに森の奥へと足を進めた。

ここ冥府の森は磁場が狂つていて、常に高濃度の魔力が渦巻く特殊な土地だ。

そのせいで浮かばれない魂が世界中から集まつてくるのだ。魔力を取り込んで穢れてしまつた魂は実体化して、人々に襲いかかる。それが魔物の正体だ。

穢れた魂は聖女が使う魔法で浄化されない限り、たとえ倒されても時間が経てば復活してしまうので不死の魔物と呼ばれている。

生前の想いが強ければ強いほど強力な魔物となつて目的を果たそうと暴走し、街や村を破壊していく。そんな危険な魔物がうようよ湧いてくるのが冥府の森だ。

だからいくら緑と清らかな水があふれ、肥沃な土壤で貴重な魔石がふんだんに眠る場所だとしても、治めるのは困難を極めた。

現在は大陸一の軍事大国であるユーネリッド帝国が管理している。帝国はこの危険地帯に屋敷を建て、軍の中でも指折りの猛者をその管理者として常駐させているらしい。

今のところ、その管理者には見つかっていないはずだ。というか、とんでもない危険地域なので、帝国軍以外の人間は、ほほいない。

たまに見かけるのは、魔石を無断で採取しに来た冒険者くらいだ。冥府の森はその性質から、高濃度の魔力を含んだ鉱石が魔石となつてその辺にごろごろ転がっている。

質のいい魔石は高級魔道具の製作でよく使われるため、かなりの高値がつく。だけど、そんな不届き者も帝国軍の騎士たちがすぐに捕縛して連行していった。

無断で侵入した者は捕らえられ、牢に入れられると聞いている。自由を手に入れるためは、ここで帝国軍に捕まるわけにはいかない。そのため騎士を見かけたらすぐに転移魔道具を起動して逃げ回つていた。

できるだけ帝国軍の騎士に会わないようこつそりと控えめに過ごして、サクッと隣国に抜けよう。「それにしても……虫ずら姿を消しているなんておかしいわね」

狩りをするために森の奥へ来たけれど、明らかにいつもと様子が違う。

ここまで生き物の気配がしないなんて、ありえない。

次の瞬間、耳に届いたのは大地を震わせるような咆哮ぼうこうだつた。

『グオオオオオオ!!』

巨大な魔物が丸太のような腕を振り回して、木々をなぎ払つてゐる。瞳は自我を失つてゐるようだつた。五メートルもある身体全体に包帯が巻かれたアンデッドモンスター、これはグレートマミーだ。

煮えたぎつた血のようないい双眼が、私を捉える。

こつそりと控えめにしたいのに、こんな大きな魔物に狙われたらそもそも言つていられない。

どうか帝国軍に見つかりませんようにと強く祈りつつ、浄化魔法を発動させる。

【黒薔薇の鎮魂歌レクイエム】

グレートマニーにいばらが絡まる。その無数にある棘が、魔物の魔力と、負の感情を取り込んでいく。やがて黒い薔薇が咲き乱れ、はらはらと散つていった。

黒い花びらが舞い散る、幻想的な景色。

グレートマニーがしぶむように消えて、その後に現れたのは、すっかり浄化された七色の魂だ。

「最後の言葉はあるかしら？」

『ありが……とう』

それだけ残して艶やかに輝く魂は天へと還つていった。

どんな想いを残したのかはわからない。でも、どうか来世は穏やかに過ごせますようにと、そう願つた。

私を含めて浄化の聖女と呼ばれる者たちには、ふたつの役目がある。ひとつめの役目は破魔の聖女たちが倒した魔物の魂を浄化することだ。通常は守護の聖女が張った結界の中で魂の浄化をする。けれども、私は前任の浄化の認定聖女様のスバルタ教育のおかげで、倒されていない魔物の魂も浄化できるようになつてしまつた。あの時のみんなの驚いた顔は今でも覚えている。

ふたつめの役目は、浄化した魂がこの世に残した最後の言葉をご遺族に届けることだ。

魂が天に還る際に、魔物になつてしまつた原因ともいえる強い想いを、浄化をした聖女だけが聞くことができる。聖女になつてからの八年間、この魂の最後の言葉を届ける時はいつも心を抉られる。

私の言葉で悲しみにくれる人や遺産の心配をする人、まるで興味を持たない人、いろんな人たち

がいた。悲しみから責め立てられることも多々あつて、私はやがて笑うことを忘れていた。

ちなみにブランド殿下の話は心底つまらなかつたので、真顔になつていただけだ。

「さて、魔物が消えたから今度こそ獲物を狩れるかしら？」

そう思つて、生き物の気配を探つた時だつた。

カサリと音を立てて葉が揺れる。ハツとして音がした方に視線を向けた。

そこにいたのは、ひとりの青年だつた。

スラリとした長身に、柔らかそうな黒髪がふわりと風に揺れている。私を見つめる琥珀色の瞳は、驚きに見開かれていた。スッと通つた鼻筋と、ほどよい厚みのある唇が温かい印象を与える。

どこからどう見ても美形と言つて差し支えない、見目のいい男だ。黒っぽい衣装をまとう姿は隙がなく、腰に佩いた剣と併まい、あふれるような魔力から只者ではないとわかる。

人間……こんなところに？ 私も人のことは言えないけれど。ああ、もしかしてこの方も同じ理由で驚いていらつしやるのかしら？

「あの……？」

声をかけてから、ひとつ可能性が頭をよぎる。

冥府の森の管理者——まさか、この優しげな青年が？

この前見た軍人とは格好が違うだけれど。

ただ、こんなところにいる人間が一般人でないのはわかる。私のように追放されたのか、それとも帝国軍の人間なのか。または魔石を窃取しに来た冒險者か。

さりげなく見極めていたら、彼の剣にユーフリッド帝国軍の紋章が刻んであることに気が付いた。

しまった！ 帝国軍の人間だわ！ ということは管理者側!?

これは、逃げるしかない！！

私はとっさにマジックポーチから緊急避難用の転移魔道具を取り出し、起動させた。

「おい！ 待つ——」

目がくらむほどの光に包まれて身体がフワリと軽くなる。

少ししてまばゆい光が収まつたので目を開くと、三日前にテントを張った大岩の前に立つていた。確かに逃げ出せたはずなのだけど——

「ギルティア」

振り切つたはずの男は、すでに私の転移先にいた。

転移の魔道具が壊れたわけではない。ちゃんと発動したし、さつきとは違う場所に私は立つている。目の前の大岩がその証拠だ。

男はその大岩にゆつたりともたれかかり、私をじっと見つめている。

「な!? なぜ私の転移先にいるの!?」

「ああ、俺は転移魔法が使えるから、魔道具より速く移動できる。それより、だいぶ無理したな。少し眠るといい」

「えつ……!?」

男が私に手をかざすと、甘い匂いがふわりと香る。途端に頭がクラクラとして身体から力が抜け

ていった。

ここで倒れたら、ダ……メ——

最後に感じた包まれるような温もりに、なぜか懐かしさが込み上げた。どんなんに抗つても私の意識は深い闇の中へ落ちていく。

「やつと……捕まえた」

青年が呟いた言葉を薄れゆく意識では拾うことができず、私の記憶はそこで途絶えた。

ああ、なんて心地いいのかしら。

ふかふかのベッドで暖かい毛布に包まれて、幸せすぎるわ。

なにより、こんなにゆっくり眠れるなんて久しぶり……え、待つて。

勢いよく起き上がりつて、ここがどこかの建物の一室であることに気が付いた。着ているものも、いつの間にか白いナイトウエアになつていて。想像していたのと違う状況に困惑する。

「私……捕まつた……わよね？」

慌ててベッドから降りて扉を開けようとするも、ガチャガチャと音が鳴るだけで開かない。窓があつたので身を乗り出して外を見渡したけれど、鬱蒼と生い茂る木々が広がつていてるだけだった。街の気配はまったく感じられないし、前方にある木々の間から魔物が飛び立つたのが見えたから、まだ冥府の森の中にいるようだ。窓から見る限りここは三階で、バルコニーもないから降りられない。

冥府の森に存在する建物……そんなの帝国軍が駐在する屋敷しか考えられない。おそらく氣を失っている間に帝国軍が管理する屋敷まで運ばれて、牢屋代わりにこの部屋に閉じ込められたのだ。サーツと血の気が引いていく。

八年にも及ぶ自由がきかない聖女の生活からやつと抜け出して、いざこれからという時に牢屋に入れられてしまうの？

「嘘……これが私の人生なの？」

なにも知らなければ耐えられた。でも私は自由を知つてしまつた。わずか一週間だつたけれどやつと息ができる、大空を飛ぶ鳥になつたみたいだつた。

あの解放感を忘れられるわけがない！

「なんとしてでも逃げてやるわ！」

この八年で培つた、ど根性魂がムクムクと起き上がる。聖女の訓練は過酷だつたから、これくらいのことではへこたれない。私は高速で頭を回転させて、部屋の中を物色しながら逃亡計画を立てた。

針金なんて落ちてないわね……ナイフやフォークなどの金属類もない。

扉を開けられそうなものはなにもなかつた。それなら、もう窓しかない。シーツやカーテンを使つて、下まで降りられないかしら？

シーツをベッドから剥<sup>は</sup>ぎ取り、カーテンも体重をかけてなんとか取り外して、一本の長い長いロープにする。それをベッドの脚にくくりつけて窓から垂らした。

「少し長さが足りないみたいだけど……まあ、最後は飛び降りればいいわね」正直怖い。こんなこと、いくら聖女の訓練でもやつたことなかつた。でも自由を奪われるのだけは、耐えられない。

覚悟を決めて、シーツを握りしめた。

そつと窓枠に足をのせて身体の向きを変える。シーツをしっかりと掴んだまま、気合を入れて窓の外に出た。

途端にベッドがズルズルと動いて、そのまま私の身体も落ちてゆく。

ぎやああああああああああああ!!

こつ!! こ、怖いですわ——!! 逃げる前に死ぬわっ!!

心臓がバツクンバツクンと激しく音を立ててているのがわかる。口から心臓が出そうになることはまさにこのことだ。

それでも叫ばなかつたのは及第点だと思う。まだ揺れている身体をなんとかしようと、外壁に足をついた。

はああ、本当に死ぬかと思つたわ!

少しだけ淑女らしくなかつたけれど、まあ、誰も見てないからいいわよね。

そう、誰も——

降りようと下を見たところで、バツチリと琥珀色の双眸と視線が合つた。

あの帝国軍の男がいやらしい感じでニヤリと笑い、二階の窓から身を乗り出している。その手には、しつかりとシーツが巻き取られていた。

「また逃げられるところだつたな」

こうして私の逃亡計画は終わりを迎えたのだった。

「いい加減にしてもらえないかしら?」

「ククツ……いや、もう少し……ブフツ、待つてくれ……クククツ」

目の前の男は先ほどの私の無様な様子に、いまだ腹を抱えて笑つてゐる。

かれこれ十分以上は笑つてゐるのではないかしら? 本当に失礼な男だわ。私なんて、まだ心臓が口から飛び出そうなほどバクバクしているのに!

「それで、私はこれからどうなるの? どこの牢屋に入れられるの?」

「ははつ……は? 犯屋?」

「貴方はユーリッド帝国軍の人間でしよう? ここはユーリッド帝国が管理しているのだから、私は不法侵入者として処罰を受けるのではなくて?」

実際にこの森に入つたと思われる者は、誰ひとり帰つてきていない。まともな扱いをされるかどうかもわからない。

だけど最後は本当の私らしく、後悔の念を持つことなく天に還りたい。

「もう覚悟は決めたわ。せめて楽に処刑してちようだい」

「いや待て、誰がそんな物騒な話をした?」

心底わからないという表情だ。

私の覚悟はできているのだから、隠さなくともいいのに。

「誰がつて……ここは冥府の森よね?」

「そうだ」

「ユークリッド帝国軍が管理しているのよね？」

「ああ」

「それなら私は許可なくこの森で生活していたのだから、不法侵入者よね？」

「いや、そこが違う」

「え？」

「なんですって？ なにが違うのよ？」

青年はようやく笑いがおさまつたらしく、いたつて真剣に話をしてくれる。その様子に嘘はないようだ。

「ユークリッド帝国が管理はしているが、所有はしていないから不法侵入にはならない」

「……そうなの？ それなら私は侵入者として牢屋に入れられるのではないの？」

「魔石を窃取しに来たなら話は別だが、罪を犯していないのに牢屋に入れるわけがないだろう。少なくとも帝国軍が管理している限り、そんな横暴なことはしない」

呆れたように小さなため息をつき、青年は説明をしてくれた。

「なんてことなの！ 私はまだ自由なのね!!」

私は嬉しくて、満面の笑みを浮かべる。

青年はなぜかカキンッと固まつた後、咳払いして姿勢を正す。そして真正面から私を見すえて続けた。

「自由なのは構わないが、最低限の条件はつけさせてもらう」

「最低限の条件？」

青年はぐつと眉間にシワを寄せて、一切の妥協を許さないというような決意に満ちた表情で条件を挙げていく。

「まず、テントは禁止だ」

「あら。それなら寝袋はいいのかしら？」

青年の眉間にシワが一本増えた。

「もつとダメだ！ 次に狩りも禁止だ」

「それなら釣りしかないわね。道具の用意は頼めるかしら？」

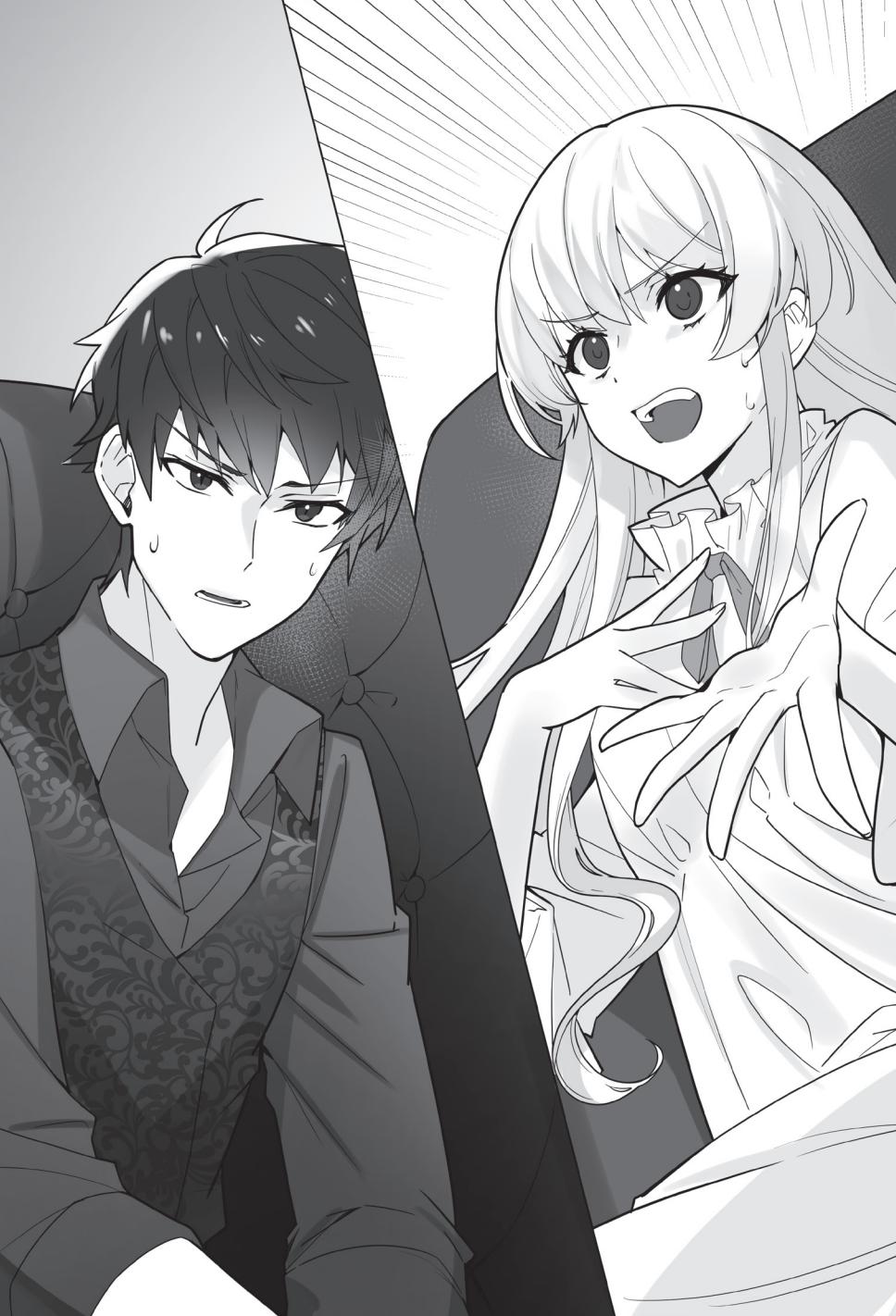
青年は眉間にシワをさらに増やして、激しく禁止事項を口にする。

「道具は用意しない！ 野草だけで食事を済ますのもダメだ！ 結界も張らずにのんびり外でお茶を楽しむのもダメだ！」

「待つて、それでは私がここで生きていけないわ！ 食べるものは森の中で手に入れないと無理よ！」

あまりの厳しい条件に思わず大きな声を上げてしまう。森で手に入れられないのなら街まで買に行かなければならないのだが、最寄りの村まで歩いて片道二日はかかる。

念のために持つてきていた転移魔道具は帝国軍の騎士たちから逃れる時も使つていたので、次は魔石を交換しないと利用できない。魔石を交換するにも街にある魔道具専門店まで行く必要がある。



馬車なんてこの辺は通らないし、そこまで歩いていけということなのか。

……それにしても、ここに来てから暮らしぶりが簡抜けだ。どうやら私の存在はバレていたらしい。必死に逃げ回っていたのに、なんともいえない気持ちになる。

「無理ではない。この屋敷にいればいい」

「……なにを、おっしゃっているのか、よくわからないわ」

この方はなにを血迷つたことを口走っているのかしら？ 私はそんなことを望んでいるわけではないわ。ただ自由がほしいだけよ。

「このお屋敷はユークリッド帝国のものではないの？」

「正確には帝国から派遣された管理者と騎士たちが使える屋敷だ」

「それなら尚更ですわ。私はカメロン王国の元淨化の認定聖女で、追放されてこの森に捨てられた者です。ここでお世話になるわけにはいかないわ」

これでわかつてくれたかしら？ あまり話したくなかったけれど、納得してもらうためには仕方ないわ。

「……追放の話は知っている。いつたいなぜそんなことになつたんだ？」

「そうですわね。簡単に申し上げると、新たな想い人ができた元婚約者が、私から認定聖女の地位を剥奪し<sup>はなだつ</sup>冤罪<sup>えんざい</sup>を着せてこの森に追放したのです」

自分で説明しておいてなんだけど、相当悲惨な話に聞こえる。ひどすぎて笑えてくるほどだ。

「なるほど……それは後で詳しく聞かせてくれるか？」

え、どうしてこの方が機嫌を悪くするの？ なにか気分を害するような内容だつたかしら？

「ええ、それは構わないけれど……私はむしろ自由になれて喜んでおりますの。だからできれば好きにさせてほしいのです」

すると彼はふわりと溶けるように優しい顔になつて、琥珀色の瞳で私を見つめてくる。この方の反応がいまいち理解できない。

「本当に君は……ならば、管理者としての命令だ。ギルティア・エル・マクスター。君が冥府の森にいる間は、この屋敷に逗留せよ」

「いえ、ですから私は自由が……私は、名乗つておりませんわ……そういえば森でも名を呼ばれたような……しかも管理者？ 貴方は管理者ですか!?」

「ああ、俺が冥府の森の管理者レクシアス・ハデスだ」

なんてこと！ この方が管理者だつたなんて、聞いてなくてよ——！？

\* \* \*

冥府の森の管理者レクシアス・ハデス。俺がそう呼ばれるようになつてから、もう三年が経つた。まさかこんな場所でギルティアと会えるなんて想像もしていなかつた。

俺の目の前でころころと表情を変える彼女から目が離せない。そんなギルティアを堪能しながら、俺は初めて彼女と会つた時のことを思い出していた。

俺がギルティアに出会つたのは十一歳の時だ。

俺は父の仕事に同行してカメロン王国を訪れていた。後学のためにと、毎回必ず兄弟の誰かが連れていかれていた。その時はたまたま俺だつたんだ。

父たちが仕事の話をしている間は、俺の遊び相手として仕事相手の娘があつてがわれた。それがギルティアだつた。

銀糸のような細い髪は光に透けてキラキラしていて、神秘的な紫の瞳は宝石のアメジストみたいだつた。まあ、それだけならここまで俺の心に残らなかつたと思う。

ある時ふたりで庭園を散歩中に、鳥の籠から落ちて怪我をしているのを見つけた。ギルティアはその籠を介抱すると言い出して、俺も暇だつたから世話を手伝つた。でもその甲斐なく、籠はわずか三日で壊くなつてしまつた。

ギルティアが泣くと思つた。彼女はまだ八歳の子供だし、泣かれたら面倒だなつて思つていた。

だけどその八歳の少女は凛とした佇まい、聖女の特別な魔法を使つた。

『黒薔薇の鎮魂歌』

ギルティアがそう言うと、籠の魂は七色の光を放つて彼女の前に現れた。黒薔薇の花びらがあたりに舞い散つていて、とても美しかつた。心を奪われたのはその時だ。

俺の目にはギルティアしか映らなくなつた。

とても不思議な光景だつた。俺には魂の言葉は聞き取れなかつたけど、七色の光が天に還つた後に彼女がこう言つたんだ。

『あの雛が、寂しい時に撫でてくれて嬉しかつたと言つていました』

それを聞いて俺は不覚にも泣いてしまつた。

夜は俺が雛の世話をしていたんだけど、寂しかつたのは俺だつたから。

後学のためと言つて連れてこられても、いつも放置されていた。自國でも俺は妾の子供だつたら待遇はよくなかつたし、友達だつてひとりもいなかつた。母は長い間病に臥せつて甘えることもできなかつた。

そつと触れた雛の温もりは心地よくて、俺の寂しさを埋めてくれた。

そんなみつともなく泣いている俺を、ギルティアは優しく抱きしめた。

俺より小さい女の子なのに、まるで包み込まれたようだつた。

俺は完全にギルティアに堕ちた。

それから俺は勉強や剣術、魔法の習得に励んだ。ギルティアに求婚して受け入れてもらえるように、あんな情けない姿は二度と晒さないようにするためだ。そうして五年後に、また俺がカメロン王国に行ける機会が回つてきた。

前に会つた時はメロンタルトが好物だと言つていたから、カメロン王国の王都で一番人気のある店も調べておいた。市井を視察するといえば、外出の許可は出るだろう。

やつと再会できると期待していたのに、話し相手として来たのはギルティアの兄だつた。さりげ

なくギルティアのことを聞いたら、浄化の認定聖女に選ばれて第三王子の婚約者になつたという。ショックなんでものじやなかつた。その後なにをどうしていたのか、うろ覚えだ。  
あぐく、この五年の努力の結果なのか、俺を厄介払いしたくてわざと危険な任務をやらせたいのか、魔物があふれる冥府の森の管理者に任命された。まあ、その時の俺にはどうでもよかつたから黙つて引き受けた。

俺は冥府の森に引きこもつて、砂を噛むような日々を過ごした。

森全体に結界を張り、とりあえず森から魔物たちが出られないようにして、増えすぎた時は間引きした。冥府の森の影響で結界の外でも魔物は大量発生していたけど、他国の領土だし、それくらいは自分たちで処理するべきだろう。  
ああ、カメロン王国の方角だけはギルティアがいるから、結界の外も手が回る時は魔物を処理しておいた。磁場の影響なのか、そちらの方向はやたら魔物が多く発生していたからできるだけ気を配つていたんだ。ギルティアがあの国にいない以上、もう必要ないが。

魔物の異質な存在はよく目立つから、結界の中にいる個体ならすべて把握できていた。戦う時以外は、執務室でただ目の前の作業をこなすだけの時間を過ごした。

そんなある日、騎士たちから森に若い女性が迷い込んでいるという報告が上がつた。たまに誤つて迷い込んだり、なにかの罰でこの森に追放されたりする人間がいるので、今回もそうだと思つて

いた。いつものように見つけたら帝国へ連れていくか、希望の国へ送り届けるように指示を出して終わるはずだった。

ところがある日、俺の右腕である冥府の騎士団の副団長、エイデンから追加で報告を受けた。

「レクシアス様、先日報告した女性の件ですが、どうやら森で自活しているようです」

「は？ 女がひとりでこの森で生活なんて……できるのか？」

冥府の森で自活なんて、聞いたこともない内容に耳を疑つた。

「していますね。テントを持ち込んでいるようで、野営の跡もありました。騎士たちが声をかける前に姿を消すので、まだ本人から話を聞けていませんが」

騎士たちの報告をまとめると、テントで寝起きして、結界も張らずに優雅にお茶を楽しみ、魔物を狩つたり野草を摘んだりして過ごしているようだ。にわかには信じがたいが、複数の報告が上がつてているから間違いないだろう。

場合によっては強制的に帝国に送り届けることも視野に入れて、あらためて指示を出した。報告書には銀髪の若い女性とある。俺の心から決して消えない愛しい彼女が頭をよぎる。

だけどそんな都合のいい話があるわけがない。

そもそもこんなところに認定聖女であるギルティアがいるわけがないと、くだらない考えを捨てた。

それから数日後、強い魔物の気配を感じ取つた。

霧雨気からして大型のグレートマミーだ。タイミングの悪いことに帝国で大きな祭りが開かれていて、家族がいる騎士たちは休暇を取つていた。ほかの騎士たちも巡回や魔物の討伐で手がふさがつていたので、面倒だなと思いながらも俺は単身、討伐に向かつた。

——そこで目にしたのはあの日カメロン王国で見た黒薔薇の花びらと、さらに美しく成長したギルティアの姿だった。

あまりに望みすぎて白昼夢でも見てているのかと思つた。

ギルティアを見間違うことはないと自信があつたが、ここは冥府の森だ。なにが起きててもおかしくない。

慎重になりつつも、心中は歓喜にあふれていた。そこで騎士たちから上がつていた報告を思い出す。

まさか、冥府の森で自活していた女性が本当にギルティアだつたのか？

「あの……？」

少し高めの透き通るような声が、俺の鼓膜を震わせる。子供の頃とは違うけど、ずっと聴いていたいほど心地いい。

俺が余韻に浸つていると、ギルティアは急に顔を引きつらせてウエストポーチを漁り始めた。

「おい！ 待つ——」

そして、あつという間に姿を消してしまつた。

夢か現実か自信がなかつたけれど、グレートマニーの魂は確かに天上に還つてゐるし、黒い薔薇の花びらも残つていた。

ギルティアがいる。

俺の手の届く場所にいる。

それが夢ではないと確信したくて、魔道具の痕跡を頼りにギルティアの後を追つた。幸いにも魔道具での転移は魔石の魔力を変換するため、わずかにタイムラグが生じる。

俺は転移魔法で先回りして、疲れた様子のギルティアに眠りを誘う香を使つた。多少は卑怯なやり方だったかもしれないが仕方ない。愛しい人の健康には代え難いのだ。

「やつと……捕まえた」

もう決して離さないと誓いながら、俺は腕の中で眠るギルティアを屋敷に連れ帰つた。

屋敷に戻るや否や部下に指示を出して、カameron王国でなにがあつたのか調べた。

結果、カameron王国の第三王子は万死に値するという結論に至つた。

俺がどんなに望んでも手に入れられなかつたギルティアを、やすやすと手に入れておいて婚約破棄だと？ しかも大勢が集まる夜会でだと？ ああ、そうだ。脳みそが足りてない相手の女も万死に値するな。

改めて確認してみると、カameron王国の国王から、ギルティア捜索のために冥府の森に入りたいと申請が届いていた。もちろん即却下しておいた。自分から手放しておいて捜索する意味がわから

ない。

今はギルティアの回復が最優先だ。それに、こんな素晴らしい女性を捨てるような王国のヤツらに渡せるわけがない。

なにより俺がもう手放したくない。ギルティアを俺のものにすると決めたんだ。

だけどなぜ彼女は俺から逃げ出したんだ？

やはり子供の頃にたつた一度会つたくらいでは覚えてないか……いや、いいんだ。俺がギルティアのことを覚えていれば問題ない。

彼女を屋敷の一番いい部屋に運び、最高の寝具でゆっくりと眠らせる。そろそろ目覚める頃かとソワソワしていたら、突然、真上にある彼女の部屋からガタソソッというもののすごい音が聞こえてきた。慌てて窓から見上げたら、彼女がシーツに掴まつてぶら下がつていた。

驚いたのと、笑いたいのと、目のやり場に困るのと、いろんな感情がごちゃ混ぜになつたけれど、とりあえず逃走は阻止できたようでホッとした。

ギルティアが俺を見つけた時の絶望的な顔が、たまらなく愛しいと思つた。

そうだ、そうやつてあきらめて、俺に堕ちてきて。

またあのアメジストみたいな瞳で俺を見つめて。

美しいその声で俺の名前を呼んで。

ギルティア・エル・マクスター。君をもう逃すつもりはないのだから。

\* \* \*

「で、ギルティアはなんと言ったんだ？」

「……黒いドレスを着てるのは死者の魂を弔うためですわ。ニコリともしないのは申し訳ないことをしたが、殿下のお話には笑顔になる要素がございませんでしたので、と」

私は今、尋問を受けている。しかも帝国軍の管理者直々にだ。

なぜだかわからないけど、婚約破棄の時の話を根掘り葉掘り聞かれていた。

「そうか、さすがギルティアだ。ククッ、容赦ないな」

「こんなことを聞いてどうされるのですか？」

ハデス様は姿勢を崩して挑戦的な視線を向けてくる。頬杖をついていても美青年なのは変わらないのね……と考えてしまう自分が情けない。

いけないわ、見目のいい男に騙されないようにしなくては。ブランド殿下の件で、学習したはずよ。しかもブランド殿下より素敵なんですもの、用心しすぎても足りないくらいだわ。

「ギルティアはどうしたいんだ？」

「質問しているのは私ですわ。それから私のやりたいことは決まっています」

「なんだ？ 言つてみろ」

「とにかく自由になりたいのです。誰からも強制されず、ただ、自分の心のままに生きていきたい

のです」

彼はその言葉に腕を組む。さっきまでの楽しそうな気配はなりをひそめて、なにかを真剣に考えているようだ。

もし本当に侵入者として処罰しないのなら、ある程度自由にさせてくれてもいいと思うのだけれど。

「そうだな、善処しよう」

ハデス様の言質げんちを取つてから一週間が過ぎた。

『善処しよう』

そう言つたわよね？ ハデス様はそう言つたわよね!? それなのに、いまだに部屋から出してもらえないのだけど、どういうことかしら?!

「しかもここに来てからハデス様にしか会つてないし……待つて、やっぱり私を牢屋に入れるつもりかもしれないわ」

この屋敷に来てから、ハデス様以外の人間に会つていない。彼が食事を運んできてくれる、部屋の掃除も魔道具ひとつで済ませてくれる。

身の回りのことは訓練の一環でできるようになつていたので、私は問題なかつたけれど、もしひとりでは着替えもできない深窓の令嬢だつたら大変なことになつていた。

「人の気配は感じるけど……私と会わせたくないのかしら?」

「なんだ？ 会いたいヤツでもいるのか？」

ヒュツと喉が絞まるような圧迫感を感じて振り返ると、ハデス様が突き刺さりそうな冷氣をまとい扉にもたれて立っていた。いつもはちゃんとノックしてくれるので、今回はいきなり扉を開けたようだ。

文句のひとつも言いたいが、全面的に世話をされている立場だ。出かけていた言葉を呑み込み、代わりに嫌味をこめて問いかけに答えた。

「違いますわ。ここに来てからハデス様以外、どなたともお会いしないので不自然に感じたのです」

私を人前に出せない理由もあるのかと、暗に尋ねる。

だつてハデス様がしているのは、本来なら侍女やメイドがやる仕事だもの。

「そうか……この部屋には近づくなと命じてあるからな。心配しなくていい」

えーと、そんな命令が出されていたの？ いつたいなぜ……？ 三食昼寝つきで、十分すぎるほど贅沢な毎日を過ごさせてもらっているけれど、納得できないわ。

「ハデス様、私は他の方と交流を持つてはいけないのですか？」

そうよ、この状態は軟禁しているということではないのかしら？ 私がまた逃げ出さないように、外部との接触を絶っているのではなくて？

「交流など必要ない。俺がすべて対応する。不満か？」

ハデス様はすこぶる機嫌が悪くなつて、眉間にシワを寄せている。

ハデス様以外に誰にも会わないよう部屋に閉じ込められているなんて、環境だけは素晴らしい牢獄じゃない。やっぱりここから逃げ出さないと、私に自由はないようだわ。

「いいえ、不満はございません。わかりました。大人しくしておりますわ」

と言いつつ、私は必ずここから逃げ出すと心に誓う。私がほしいのは自由なのだ。

「そうしてくれると安心だ。そうだ、ギルティアが好きなメロンタルトを用意したんだ。食べるだろう？」

「メロンタルトですか？ ええ！ もちろんいただきますわ！」

そうね、逃げ出すのはこのメロンタルトをしつかりと堪能してからでも遅くないわ。私の大好物を用意してくれるなんて、なかなかやり手のようね。

「変わつてなくてよかつた」

「え？ 今なにかおつしやいまして？」

「いや、ほら一緒に食べよう」

メロンタルトのあまりの美味しさに、この日はうつかり幸せな気持ちで過ごしてしまい、逃亡計画は立てられなかつた。

翌日は綺麗にラッピングされた包みを渡された。

「これはなんですか？」

「開けてみたらわかる」

そつとりボンを解いて包みを開けると、フワリと優しく甘い香りが鼻をくすぐった。

「これは……名店フラワーがデスの石鹼ですね？ しかもいつも使っている私が好きな香りですわ！」

「前に頼んでいたものがやっと届いたんだ。こんな場所だから時間がかかってしまった。すまない」

「まあ、わざわざ取り寄せてくださいましたの？ ハデス様、ありがとうございます！」

せつからだから今日はこの石鹼を使って、ゆっくりバスタイムを楽しみましょう。逃亡計画は明日考えますわ。

さらに翌日は、美しく洗練された黒いドレスをプレゼントされた。

「このデザインは帝国のものだが……どうだ？」

「まあ！ 帝国の中のデザインは、ずつと憧れていますの！ そうです、この肘から先にフリア状のドレスが飾られているのが、かわいらしくてたまりません！ 胸もとの金糸の薔薇の刺繡も本当に美しいですわ！ ハデス様、とっても素敵です！」

「明日は……その、俺が贈ったドレスを着てもらえないか？」

「ええ！ もちろんですわ！ ああ、明日が楽しみです！」

明日はこの素敵なドレスを着ると約束してしまったから、逃亡計画を立てるのはまた今度にしましょう。

翌日は朝から張り切つてドレスに着替えた。こんな風に誰かに見せるために着飾るのなんて、中央教会ではなかつたことだから心が弾んでいる。いつもは下ろしているだけの髪もハーフアップにした。

「ハデス様、早速いたいたドレスを着てみたのですが……いかがでしょう？」

「ああ、よく似合っている」

そう言って、ハデス様がとろけるような笑みを浮かべる。いつもはわりと硬めの表情が柔らかく崩れて、破壊力が半端ない。

ちよつとこの笑顔は反則ではないかしら……！ うつかり勘違いしそうになつてしまふじゃない！ ダ、ダメだわ、いい加減流されすぎよね。毎日毎日私の心をグッと掴む贈り物をもらつても、自由がないのは変わりないわ！

私が一番ほしいのは自由なのよ!!

ブランド殿下からはプレゼントなんて贈られたことがなかつたから、浮かれすぎてしまつたのね。いつの間にかこの屋敷に来てから二週間も経つていてるわ。気を引きしめて今夜にでも逃亡計画を立ててのよ！

ハデス様が運んできた夕食をきれいに平らげた後は、ゆっくりと湯船につかつてリラックスした。逃亡したら次にくつろげるのは、いつになるかわからない。

バスタイムをしつかりと堪能してベッドの上で計画を立て始める。そこで私は氣付いてしまった。

あのドレス、サイズがピッタリだつたけど、いつ私のサイズを測つたのかしら?

「そういえば、私はいつの間にかナイトウエアに着替えさせられていたわね。……まさか、あれはハデス様が？ え？ 嘘。もしそうだとしたら、恥ずかしすぎてハデス様のお顔を見られないわ!!」

夫以外の異性に肌を晒すなんて、破廉恥だと教育を受けてきた。魔物と戦つていたから、手足を晒すくらいなら気にもならないが、着替えは違う。いくらなんでも、そこまで羞恥心を捨てていない。

「そうだわ、明日の朝一で逃げましょう。絶対に、顔を合わせる前に逃げましょう」

気を取り直して、現状把握から始めた。

扉の鍵は相変わらず掛かっている。前回逃亡に失敗したせいで結界が張られてしまつて、窓からの脱出は不可能だ。そこで私はクローゼットにしまわれていたマジックポーチを漁つた。この森に入つてから、街で売ろうと薬草を見つけるたびに採取していたのだ。薬草の種類や組み合わせによつては、人を眠らせる効果を發揮する。さらに野営のために持つてきていた、薬草を粉にする魔道具を取り出した。

「これを使おうかしら。チャンスは一度……失敗は許されないわ」

手持ちの薬草で最大限の催眠効果を發揮する粉を作る。

石鹼の入つていた包装紙を折つて小さな箱型にし、こぼれないように薬草の粉をすべて入れた。

枕に使われていた糸を解いて、粘性のある薬草を団子状にして糊はづがわりにする。扉を開けたら頭から粉が落ちてくるように箱型の包装紙を取りつけた。

「ふふふ……完璧だわ！ 明日の朝が楽しみね」

私は踊りまくる胸をなんとか抑えて、ふかふかのベッドに潜り込んだ。

——コンコンコンコン。

「ギルティア、起きているか？」

翌朝、いつものようにハデス様がやつてきた。

「ええ、どうぞ。準備はできておりますわ」

ついにハデス様が来たわ。朝食を運んできてくださつたのね。

あら、でもいつもより早い気がするわね？ まあ、いいわ。粉を吸い込まないよう、距離を取らないと。

私は鼻と口を覆うようにハンカチを押し当てた。

ガチャリと鍵が開錠されて、ゆっくりと扉が開かれていく。隙間が大きくなるにつれ、糸が引つ張られ——箱型の包装紙がひっくり返つた。

サラサラとした緑色の粉が、扉から入つてきたハデス様の頭に降り注ぐ。驚くような表情は一瞬で、ハデス様はそのままバタリと倒れ込んで静かに寝息をたて始めた。

「完璧に決まつたわね……！」

達成感に包まれながら、倒れ込んだハデス様を部屋の中に引きずり込もうと床に膝をついたところで、もうひとり倒れているのに気が付いた。

「え……？ どなたかしら？ 若い女性ね。この服装だとメイドかしら」

仕方ないので、ふたりとも部屋の中に入れて頭の下にクッションを置く。今回調合した薬はなかなか強力なので、おそらく四時間くらいは起きないだろう。

「本当にごめんなさい。でも、私はどうしても自由になりたいの」

ハデス様の穏やかな寝顔にちくりと胸が痛む。

朝一番で書いた感謝と謝罪の手紙を置いて、私はついに部屋の外へと脱出したのだった。

久しぶりの森は本当に空気がおいしい。胸いっぱいに吸い込んで、ゆっくりと深呼吸した。屋敷にはほとんど人の気配がなく、誰にも会うことなく外に出られた。

現在地がわからないのが不安だけど、太陽の向きと大体の時間でざつくりと方向を決めて歩き出す。

目指すのは冥府の森の南側に隣接している国だ。あの国は海に面しているから、船に乗つて別の大陸まで渡ればさすがに追いかけこないだろう。

「問題はどれくらいで森を抜けられるかだわ。なるべく最短距離で行きたいわね」

眠つている間にあの屋敷に連れていかれたから、距離感がまったくわからない。幸い聖女仕様の編み上げブーツを履いているから、歩くのに支障はなかった。聖女の制服でもあつた膝丈の黒いワ

ンピースの裾を揺らしてサクサクと進んでいく。

道なき道を進む途中、不穏な気配に囲まれていてことに気が付いた。木の陰から私の様子をうかがつてている魔物がいる。一匹や二匹じゃない。十匹以上はいるようだ。

「さすが冥府の森ね。魔物の発生頻度が高いわ」

つい三十分前にも倒したばかりだった。中央教会に入つてから、ほかのふたりの認定聖女たちと一緒に戦つてきた日々を思い出す。

『『グルルルル』』

『ガオオオオオ』

『『グルル！ ガウツ！』』

『黒薔薇の鎮魂歌』  
レディエム

私は湧き上がる魔力を放つて、アンデッドモンスターと化した魂たちを天上へと導いた。七色の魂たちの最後の言葉を聞いて送り出す。

「貴方たちの想いを私は忘れないから」

「どうか安らかに、穏やかに還りますように。」

そんな願いを込めるが、黒薔薇の花びらが散り始める。見慣れた光景に安堵して、再び歩を進めた。

「この調子だと、下手したら追いつかれてしまうかも知れないわ。急がないと」

それからどのくらい森の中を歩いただろう。

途中で出会うアンデッドモンスターをすべて淨化しながらひたすら突き進んだ。

「はあ……はあ……さすがに、冥府の森ね。モンスター遭遇率がおかしいわ」

もう何体淨化したのかわからない。この三時間で三桁を超えているのではないだろうか。大型のアンデッドモンスターもいたし、小型のアンデッドモンスターは數で攻めてくる。かといってアンデッドモンスターになって彷徨う魂を放つてはおけない。魔物はたとえ倒しても魂が穢れたままだと延々とこの世に留まり続け、聖女が魂を淨化するまで何度も復活してしまう。そんな悲しい魂を天上に還すのが私たちだ。

私が初めて魂を天上に還したのは、母が亡くなつた時だ。

私が初めて魂を天上に還したのは、母が亡くなつた時だ。まだ五歳だった私は、父と兄に寄り添われながら母の亡骸に縋つて泣いた。

そんな時、母の身体が淡く光つて七色の塊が身体から抜け出した。最初はそれがなにかわからなくて、でも母の温かい笑顔と同じものを感じた。だから悲しかつたけど、寂しくはなかつた。父も兄もそんな私の話を否定せずに聞いてくれていたから、これが特別なことだと気が付かなかつた。

そのうちに七色の塊は、心が形になつたもの、つまり魂なのだと理解した。だから最初に見た時に温かさを感じたのだ。でも二ヶ月ほど過ぎたところで母の魂はどんどん七色の輝きを失い、黒い塊になつていつた。

魔力を取り込んで魔物になろうとしていたのだ。次第に母の温かさを感じなくなり、それがよく

ないことだと私は理解した。

だから私は切に願つた。

『お母さま、私はもう大丈夫だよ。ずっとそばにいてくれたから寂しくなかつたよ。ずっとずっと忘れないから。お母さま、大好き。ずっと大好き』

どうか七色の光を取り戻して——黒薔薇の鎮魂歌！

母の魂は七色の輝きを取り戻し、最後の言葉を私に残した。

『……忘れないで。天上に還つても、ずっと貴方たちを見守つているわ。ギルティア、大好きよ』

そう言つてふわりと空へ昇つていく。天に還る母の魂は美しかつた。

その時、私はやつと母の死を受け入れることができた。

聖女は血統により受け継がれていく。太古の昔に世界を救つた女神カエルムの血が流れる乙女が、純粹で強い想いを抱いた時に能力が開花するのだ。力が発現する時に浮かんだ言葉が、その聖女だけの特別な魔法になる。

私はただ母に悪いものになつてほしくなかつた。もとの優しくて温かい光に戻つてほしかつた。それだけだつた。

やがてその力は父と兄の知るところとなり、中央教会に所属することになつた。そこから私の自由のない生活が始まつた。

いつも心にあるのは、ただ安らかに魂が七色の光を取り戻せますように。それだけだ。

そして母の最後の言葉を聞いて救われた私のように、誰かの心の救いになることを願つて死者の

言葉を届ける。

何百、何千の魂を浄化しても、それを伝えるまで最後の言葉を忘れないことはない。それすらも聖女の力の一部なのだと理解している。

「どんなに時間が経つても、必ず届けるわ」

だから安らかに天へお還り。

貴方の想いは私が叶えるから。そして大切な人をそつと見守っていて。

七色に輝く魂こそが、貴方の本当の姿。

『解放してくれてありがとう……このまま、まっすぐ進みなさい。アナタのしあわせが待つている』

何体目の浄化だつたかわからぬけど、その魂は私に向けて最後の言葉をくれた。ごく稀にこんなことがある。なにより嬉しかったのは、最後の言葉は常に真実だということだ。

「やつと……やつと自由になれるのね！」

この先に私のしあわせが待つて、そう思うとワクワクしてたまらず駆け出した。さつきまで重かつた身体が嘘みたいに軽い。

だつていつも真実しか言わない魂の言葉が示してくれたのだもの！

のんびり進んでなんていられないわ、もう囚われるのはごめんなのよ!!

私は自由に向かつて、森の中を駆け抜けた。

\* \* \*

「レクシアス様っ！ レクシアス様!!」

耳もとでよく知る側近の声が聞こえる。なにやら焦っている様子だ。浮上してきた意識は、だんだんと現実をとらえ始めた。

どうした？ なにがあった？ この焦り方は尋常じやない……

いや待て。確か俺はギルティアの部屋の扉を開けたところで強烈な眠気に襲われたんだ。上からなにか粉のようなものが降ってきて、意識を保つていられなかつた。

まさか、ギルティアになにかあつたのか……！？

バチッと目を開き起き上がると、俺の右腕であるエイデンがホツとした顔で立ち上がつた。

「ギルティアになにかあつたのか!?」

「……ギルティア様は逃亡されました」

「は……？ 逃げ、た？ なんで？」

エイデンは長く深いため息をついて、一気にまくしたてた。

「当然じゃないですか！ 俺は言いましたよね？ こんな風に監禁していたら逃げ出しちゃくなるつて！ いくら毎日ギルティア様好みのプレゼントを渡したつて、二週間もレクシアス様以外は接触を禁止されたうえに部屋に閉じ込められていたんですよ!?」

「うぐつ……しかし、誤解は解いたはずなんだが……」